



1階は「喫茶小樽倶楽部」として活用されている。喫茶店への改装は運河保存運動に関わっていた石塚雅明氏、柳田良造氏が手がけた。

旧小樽倉庫事務所  
(小樽市色内2丁目1番20号)  
明治23(1890)~27年、建築。木骨煉瓦造2階建。煉瓦造の事務所を中心に左右対称に倉庫が展開。加賀(石川県加賀市橋立町)の北前船主・西出孫左衛門、西谷庄八らによってつくられた。同28年、小樽倉庫株式会社が設立認可。同38年、山本久右衛門(3代目)に小樽倉庫株式会社の経営権を委譲。以後、山本家経営の小樽倉庫株式会社事務所となる。昭和57(1982)年12月、小樽倉庫株式会社が現社屋に移転。同58年3月、小樽市が建物を買収、同年7月、有限会社小樽倶楽部が「喫茶小樽倶楽部」を開店。昭和60年、小樽市指定歴史的建造物に指定。



## 旧小樽倉庫事務所

### 北前船主がつくった倉庫会社事務所



2階には屋根裏への階段がある。屋根裏は以前書庫等に使用されていた。



角部分は色違いの煉瓦が組み合わせられ、上部には幾何学的デザインが施されている。



瓦屋根には鯨が設置。原型は若狭(現福井県)の四方吉次郎の作。建築当時は若狭瓦だった。

旧小樽倉庫は、小樽を代表する歴史的建造物の一つであり、加賀の北前船主たちによって建設されたこともよく知られているが、創設の中心となった西出孫左衛門と西谷庄八の小樽での活動、倉庫設立の経緯、株式会社設立認可されたから10年あまりで山本家に経営権委譲された背景など、よく分かっていないことが多い。今回は、実質的な経営者だった西谷庄八(1860・1933)と小樽倉庫事務所(1860)の建物に焦点をあて、その歴史の一端をひも解いてみたい。

宝暦10(1760)年に加賀の橋立で創業し、北前船交易で発展した西谷家の5代目庄八は、北海道開拓が注目されていた明治20(1887)年、小樽を拠点に選り支店を設置した。同22年、北海丸、小島丸を新造し汽船運送に進出したことを契機に倉庫会社設立を検討するようになり、同郷で親戚の西出孫左衛門らに出資を募った。同26年11月、事務所・倉庫・荷捌所が完成し、同月12日に開業式が行われた。当時、事務所の一階は倉庫の中庭に通じる通路となっており、入出庫はすべてこの通路を使用し、中庭で荷捌きをしていた。

同28年、小樽倉庫株式会社は設立認可されたが、その頃、西谷庄八はドイツの汽船会社との係争、小豆取引の失敗により、事業整理で回漕部のみを継続し、小樽支店は西谷回漕店と改め、正吉(庄八の弟)が経営者となった。翌29年、



詩人・米谷祐司氏が「小樽倶楽部」店主の坂田榮子氏に送った詩。両氏は共に祝津出身。



1階入口付近。旧小樽倉庫事務所時代の雰囲気がかんじられる。



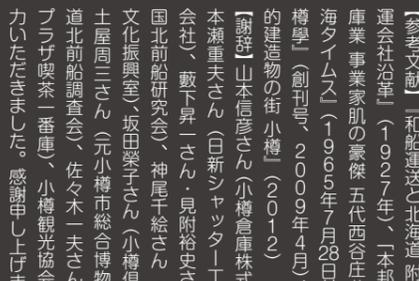
トイレの手前の空間には煉瓦の柱が露出している。

庄八は大坂に転居し海運業を離れた。同36年、正吉が病死すると庄八が海運業に復帰したが、同38年、山本久右衛門(3代目)に小樽倉庫株式会社の経営権を委譲した。以後、山本家経営の小樽倉庫株式会社事務所となった。庄八はその後、美唄炭山を手放す等、トランプルに見舞われたが経営を立て直し、大正11(1922)年には西谷海運株式会社に設立した。

昭和57(1982)年12月末、小樽倉庫株式会社が現社屋に移転し、同58年3月に小樽市が建物を買収した。当初、旧小樽倉庫全体を博物館とする構想もあったが、同年7月、アリスファームが事務所の一階を活用して「喫茶小樽倶楽部」を開店した。この時、運河保存運動の関係者が多数関わっていたことは興味深い。喫茶店への改装は石塚雅明氏、柳田良造氏、看板は山口保氏、喫茶店は佐々木一夫氏らが担当していた。昭和61年、運河が半分埋め立てられ、散策路が完成すると、運河保存運動の関係者たちは同店を離れ、経営は坂田榮子氏(当時、花月堂社長)が引き継ぎ、花月堂の和菓子やケーキを提供する喫茶となった。

北前船主が創設した倉庫事務所として建設されたこの建物は、創設者たちの小樽での盛衰と、建物の活用の歴史をいまに伝えてくれる。

撮影 落合亮(小樽商科大学写真部)  
文章 高野宏康(小樽商科大学学術研究室)



2階への階段。2階は平成2(1990)年から小樽観光協会が使用。



2階への階段。2階は平成2(1990)年から小樽観光協会が使用。



「小樽倶楽部」の看板。木彫工房メリーゴランドの山口保氏の作。